



三戸大神宮
三戸大神宮は、その昔は神明堂とよばれ、箸木山の八畳屋敷に鎮座していたといわれています。箸木山の社殿は万治元年（1658）に町内有志によって建立されました。その後、元禄元年（1688）南部家の家臣である藤枝宮内の屋敷（毘沙門館）であった現在の場所へ遷されます。歴代の藩主の尊崇が厚かったといえます。
近年は旧会津藩にゆかりのある多くの人びとが、旧会津藩士で藩校日新館館長職であった杉原凱の墓を訪ねています。江戸時代、町民の減税と市日の開設を命をかけて直訴した市神社は、商売の神様として商業者から信仰されています。また絵馬殿には江戸時代を中心に多くの絵馬が残されているほか、南部藩お抱え力士の墓も見つかるなど、三戸町のさまざまな歴史を伝える神社として注目を浴びています。



県立城山公園（三戸城跡）
戦国時代、この地方を治めていた南部氏が、それまで居城としていた聖壽寺館（現南部町）を焼失し、この高台へ城を移して三戸城としました。
その後南部氏の居城は福岡城、盛岡城へと移っていきますが、三戸城には城代や代官が置かれ、大切にされてきました。今日でも石垣や堀跡などの遺構が残り、歴史ファンが訪れるほか、春は1,600本のサクラが咲き誇る青森県南唯一のサクラの名所としても有名です。
県立城山公園内には、南部氏の歴史資料を展示している三戸城温故館のほか、縄文時代から近代までの三戸町の歴史資料を展示している三戸町立歴史民俗資料館が開設されています。そのほか、遊具や動物舎などもあり、町民の憩いの場となっています。



11ぴきのねこ
絵本「11ぴきのねこ」シリーズで知られる、漫画家馬場のぼるさんは、1927年三戸町で生まれました。町には幼少期から青年期にかけて描いた絵やポスターなどが保管されています。
終戦後さまざまな職に就いたのち、1949年上京し、小学館の学年誌でデビューしました。
1956年「ブウタン」で第1回小学館漫画賞、1973年「バクさん」「11ぴきのねことあほうどり」で文藝春秋漫画賞、1985年絵巻絵本「11ぴきのねこマラソン大会」でポロニヤ国際児童図書展エルバ賞、1993年第22回日本漫画家協会文部科学大臣賞、1995年紫綬褒章、1999年三戸町名誉町民と多くの功績を残しています。2001年73歳で永眠されました。
三戸町では馬場のぼるさんの功績をたたえ「11ぴきのねこ」によるまちづくりを進めています。町を歩くと色々な場所でおこたちに出会うことができます。



会津藩にまつわる文化財
幕末、戊辰戦争に敗れた会津藩は、青森県南部と上北、下北一帯を領地とする斗南藩に国替えされました。これにともない、三戸にも約800人の会津藩士とその家族が移住したことから、町内には会津にまつわる文化財も残っています。
観福寺の白虎隊供養碑は、旧会津藩士が白虎隊士を弔うために、明治4年に建立しました。会津の飯盛山に慰霊碑が建てられる10年前のことです。
三戸大神宮にある杉原凱の墓は、会津藩校「日新館」の学館預（館長職）だった杉原凱の墓が荒れているのを見た門下の人びとが明治19年に改めて碑を建てて弔いました。
悟真寺の戊辰戦没者招魂碑は、戊辰戦争や斗南への移住で命を落とした人すべてを弔うため、旧会津藩士たちを中心に建てられました。また、悟真寺には戊辰戦争の責任を一身に背負った萱野権兵衛の位牌も残されています。



佐藤家建物群
明治19年に雑貨屋として佐瀧本店は開業されました。当時の佐瀧本店は、屋根の上に八角形の望楼が乗った擬洋風建築でした。しかし大正12年に起こった三戸町の大火により、本店も火災にあい、大正15年に新しく鉄筋コンクリートの建物として再建されました。
天井まで4メートル50センチと広大な空間を持ち、梁や天井の縁には直線や曲線で裝飾が施されています。
佐瀧別邸は、木造モルタル2階建て、望楼3階建ての建物で、大正期に流行した20世紀初頭のドイツの住宅スタイルを基にしており、大正14年に落成しました。

国登録文化財

本店とともに設計、施工、家具などの設計も弘前市の堀江組によるものです。建物のほか、家具や電器類も当初のものが残されていることは非常に珍しく、大正期の生活風習を知るうえでも史的価値の高い建物といえます。